

# 同志社大学所蔵城陽市西山2号墳出土資料調査報告

—武器・農工具を中心として—

春日宇光

はじめに

西山2号墳は、京都府久津川古墳群中の一群である西山古墳群を構成していた古墳である。1961年、西山古墳群の所在する丘陵は宅地の造成に際して記録保存を行うことになり、同志社大学と京都大学の合同調査団が調査を行った。当古墳は同志社大学文学部酒詰仲男教授(当時)を調査担当者とする調査団によって発掘され、出土した遺物は同志社大学歴史資料館に保管されている。

これらの遺物は既に『城陽市史』で簡潔に報告されているが、西山古墳群は久津川車塚古墳をはじめとする大型の中期古墳に先立つ前期の古墳群として重要な位置を占めており、再度精密な報告が必要と考える。また、調査から長い時間を経た遺物は、特に鉄器類の劣化が激しいため、未処理の鉄製品について保存処理を検討している。処理を施す前に遺物を整理し、可能な限り詳細な記録を残すことが必要である。

こうした事情から、本稿では同志社大学歴史資料館所蔵の西山2号墳出土武器・農工具を中心に報告する。

## 1. 古墳の概要

**西山古墳群** 西山古墳群は京都府城陽市久世下大谷に所在していた7基の古墳からなる古墳群で、久津川古墳群を構成する一群である。久津川車塚古墳の北東側の台地上に位置し、北西から東にかけて順に1号～7号墳の名称が与えられている。1961年5月、同志社大学考古学研究会によって分布調査が行われ、1号墳の測量調査が実施された。同年、古墳群を含む台地上で宅地造成が計画されていることが明らかとなり、うち1号墳、2号墳、4号墳、5号墳については、7月から9月まで発掘調査が実施された。3号墳と6号墳(ともに円墳)は調査が及ぶ前に破壊され、保存が決定していた7号墳(前方後円墳)も工事が実施されて未調査のまま消滅したため、詳細は不明である。発掘調査が終了したのち、すべての古墳が破壊され、西山古墳群は完全に消滅した。かつて古墳群があった台地帯は現在、住宅地となっており、破壊前の姿を窺い知ることはできない。

1号墳は全長約80mの前方後方墳で、古墳群中最も規模が大きい。後方部から異なる種類の粘土を交互に積み重ねた特殊な粘土槨が検出され、針状鉄器と布留式土器片などが出土した。4号墳は直径25mの円墳で、2基の粘土槨を埋葬主体とする。東槨からは銅鏃、鉄剣、土師器壺が、西槨からは画文帯神獸鏡、内行花文鏡、勾玉、管玉、小玉、鉄ヤリ、鉈が出土した。5号墳は直径18mの円墳だが、盗掘のため遺物は全く検出されなかった。

**西山2号墳** 西山1号墳と西山3号墳の間に位置していた、西山古墳群中唯一の方墳である。実際



図1 西山古墳群の位置 (S=1/25000)



図2 西山古墳群 全体図  
(『城陽市史』第3巻より転載・一部改編)

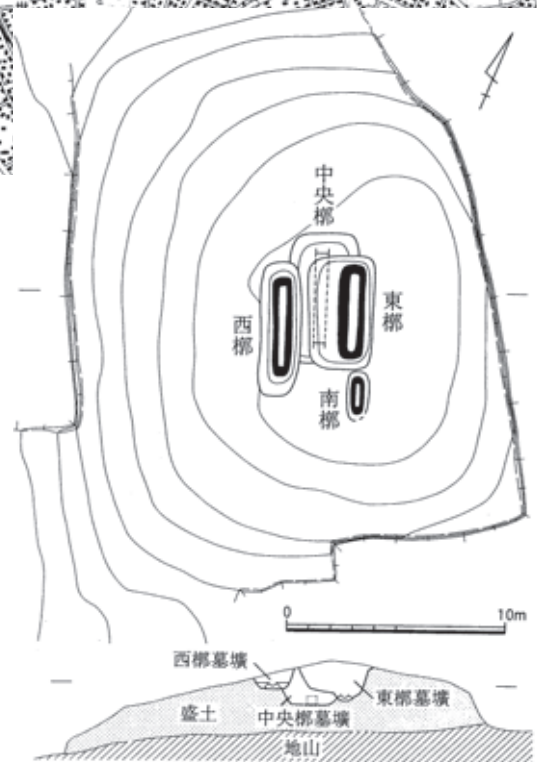


図3 西山2号墳 墳丘と埋葬施設  
(『城陽市史』第3巻より転載)

の発掘調査は同志社大学大学院生であった白石太一郎氏と石附喜三男氏が担当した。南北約27m、東西推定復元長約25m、西側からの高さ4.4mの、やや南北に長い墳丘を持つ。埴輪や葺石などの外部施設は認められていない。

### (1) 埋葬施設

墳頂部から4基の埋葬施設が検出された。全て南北方向に平行して構築されており、それぞれ位置

関係から中央槨、西槨、東槨、南槨と呼称される。中央槨の墓壙は西槨と東槨の墓壙によって切られており、これら2者よりも先に構築されたことが明白である。東槨と西槨の先後関係は互いに切り合わないため分からない。一方、南槨は東槨を避けて構築されていることから、東槨より後に造られたとみられる。中央槨は長さ4.8m、幅0.6mの組合式木棺で、遺物は全て棺内に副葬されていた。東槨は盗掘を受け、棺の正確な構造を把握することはできないが、粘土を敷いた壙底に長さ3.8m、幅0.8m程の割竹形木棺を据え、その上をさらに粘土で覆ったものであったと推定される。遺物は棺内をほりぬいた盗掘孔の内外から出土している。西槨も割竹形木棺を粘土床に置いて上部を粘土で覆ったものだが、中央槨や東槨に比べてかなり浅い位置に構築されている。棺の長さは約4.0m、幅は北端で0.6m、南端で0.5mであった。遺物は棺内と被膜粘土下から検出されている。南槨は小規模な粘土槨で、長さ1.5m、幅0.3mの箱型の木棺を内部に据えていたものと思われる。遺物は何ら認められなかった。

## (2) 出土遺物

発掘調査時に出土したとされているものは以下のとおりである。

〈中央槨〉	三角縁神獸鏡	1
	有袋鉄斧	1
	鉈	1
	鋤先	1
〈東槨〉	銅鏃	1
	鉄鏃	21
	鞆(漆塗繊維製品)	1
	劍	1
	刀子	1
	短冊形鉄斧	1
	有袋鉄斧	1
〈西槨〉	四獸鏡	1
	石釧	1
	刀子	1
	鎌	1
	有袋鉄斧	1
	不明鉄器	1(堅田・白石報告で鉄茎とされているもの)
〈その他〉	石杵	1(墳頂部近くの埋土中より出土)

## 2. 資料報告

本稿では、鉄製品と銅鏃について報告する。上記の出土遺物のうち、中央槨出土の有袋鉄斧、東槨出土の短冊形鉄斧、鉄劍、有袋鉄斧は保存処理が施されているので、処理後の実測となる。それ以外

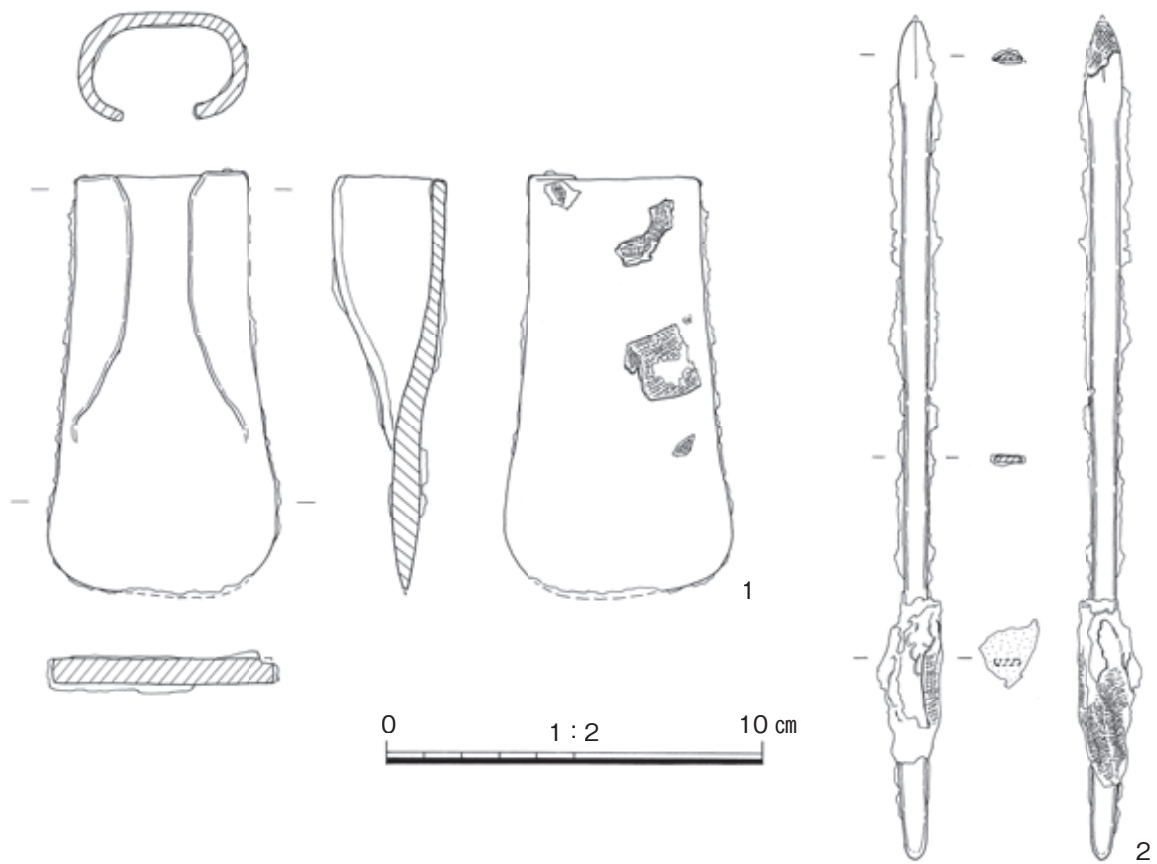


図4 中央塚出土鉄斧・鉋実測図 (S=1/2)

の遺物は保存処理が施されていない。

なお、東塚出土の鉄鏃21本中20本は『城陽市史』編纂の時点で遺存状態が極めて悪く図化されていなかったが、今回も状態を確認した結果、図化は不可能と判断した。また、中央塚出土の鋤先についても、細片化しており復元・実測が困難な状態であった。従って、本稿ではそれらを除いて報告する。

#### (1) 中央塚

##### 有袋鉄斧 (図4-1、写真1-1)

全長11.0cm、基部幅4.5cm、刃部幅6.0cm。袋部から刃部にかけて緩やかに幅が広がるが、刃部の両隅は角がなく、丸く収められている。袋部の折り返しは両端が密着しない。袋部の内部に木質等は残存していないが、わずかに朱が付着している。また、裏側には数カ所に繊維が遺存している。

##### 鉋 (図4-2、写真2-8)

大小5つの破片に分かれており、『城陽市史』では基部と茎部の破片は接合しないとされているが、実際には接合する。刃部先端を僅かに欠損するがほぼ完存する。残存長22.3cm、復元全長22.5cm、復元刃部長2.3cm、刃部最大幅1.0cm、身部長20.2cm。柳葉形の刃部は身部よりわずかに幅が広がるが、明確な関は確認できない。刃部先端と身部のやや端部寄りには繊維の付着が確認でき、副葬時に布が巻かれていたことがわかる。

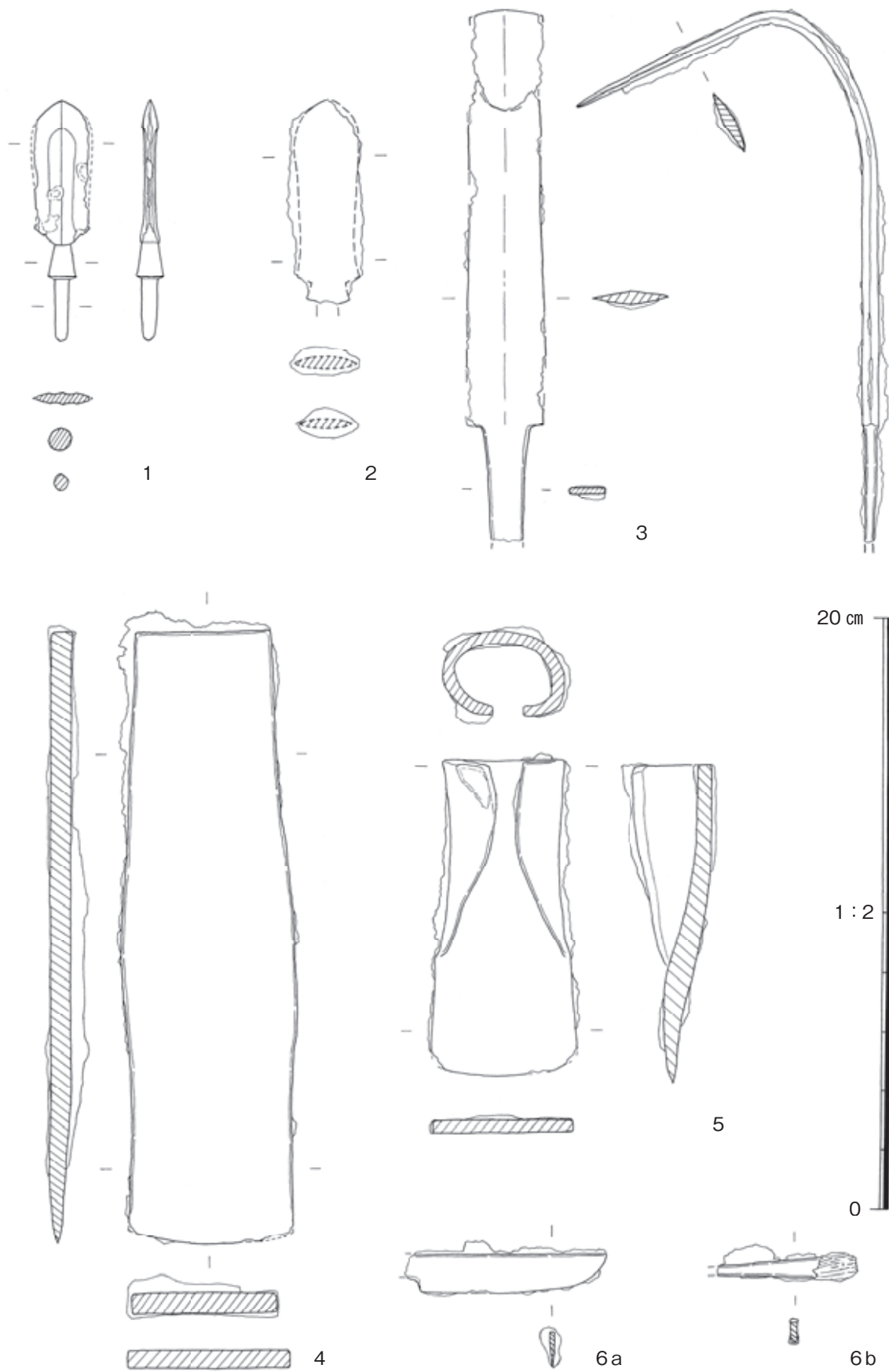


图5 東柳出土 武器・農工具実測図 (S=1/2)

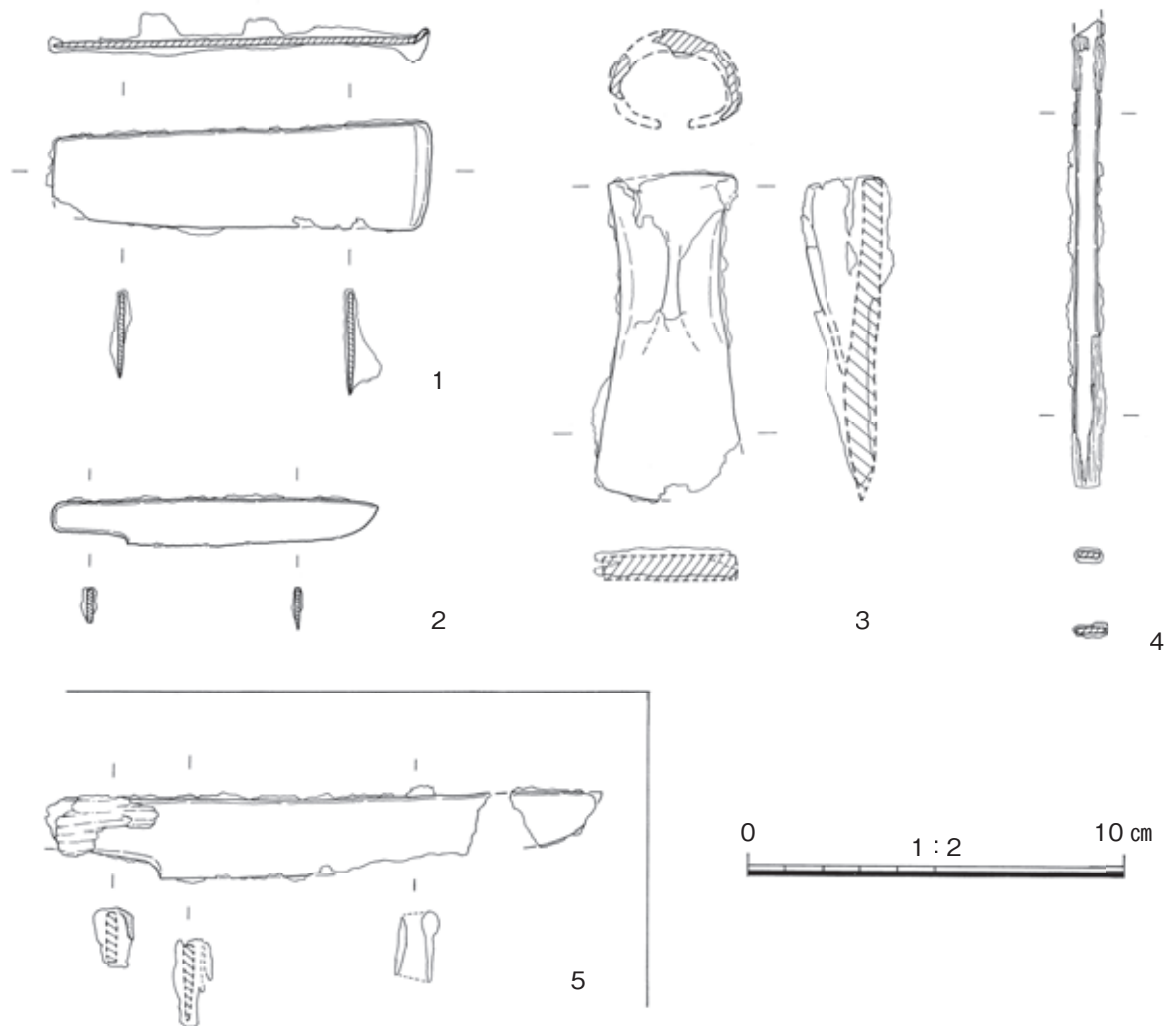


図6 西槲出土 農工具・参考資料実測図 (S=1/2)

## (2) 東槲

### 銅鍬 (図5-1、写真2-1)

有樋型銅鍬と呼ばれる類例の少ない銅鍬で、鍬身に欠損があるものの状態は良好である。篋被を持つ柳葉形の外形を呈し、中央の稜の両側に凹部をつくり出している。全長8.2cm、鍬身長4.9cm、茎部長2.1cm。全体的に丁寧に研磨されているが、茎には研磨は施されない。

樋状の凹部は鍬身の下縁まで達しており、同様の特徴を持つものは京都府園部垣内古墳や奈良県東大寺山古墳出土の有樋型銅鍬にみられる。

### 鉄鍬 (図5-2、写真2-2)

棺外からまとまって出土した鉄鍬21本中、唯一図化が可能な状態で遺存している。茎部を欠損する。残存長6.9cm、鍬身長6.2cm。柳葉式の鉄鍬で、銹化が進んでおり細部は確認できないが、鍬身下端に篋被状の部位が付属するようである。

**剣** (図5-3、写真1-4)

U字形に折り曲げられた鉄剣である。茎尻付近を欠損する。切先から約8cm程のところから曲げられ、その角度は約120°となる。残存長26.8cm、刃部長22.9cm、刃部最大幅2.7cm、茎部残存長3.9cm、刃部最大幅1.6cm。刃部は鑄を持ち、断面は菱形を呈する。関は直角関で、茎尻に向かって細くなる。目釘孔は視認できず、有機質等の残存もみられない。

**短冊形鉄斧** (図5-4、写真1-5)

長方形の鉄板に付刃しただけの袋部を持たない鉄斧である。欠損部分はほとんどなく、状態は良好である。全長20.7cm、基部幅4.6cm、刃部幅5.6cm。中央部付近の幅が膨らみ、基部で最少となる。刃部は両刃で、表面と裏面がほぼ均等に砥ぎ出されている。木質が残存していないため、本来どのように着柄されていたかは不明である。

**有袋鉄斧** (図5-5、写真1-2)

遺存状態は良好で、欠損部分は少ない。全長10.7cm、基部幅4.1cm、刃部幅4.8cm。袋部から刃部に向かって緩やかに開くが、無肩鉄斧に属する。袋部の折り返しは両端が密着しない。袋部の内部に木質等は残存していない。

**刀子** (図5-6a、写真2-3)

『城陽市史』では二つの破片に分かれて図示されているもので、もともと1個体であったかのように認識されていた刀子である。観察すると、刃部の先端が残っている破片には直角の関を認めることができ、関まで残存していることがわかる。よって、この破片は刃部長6.1cm、刃部最大幅1.3cmの刀子である。茎とされてきた破片には木質が遺存するが、接合しない上、もともと刀子の茎かどうか疑問であるため、別に示した(図5-6b、写真1-6b)。残存長4.7cm、最大幅0.8cmの断面長方形を呈する。

## (3) 西槨

**鎌** (図6-1、写真2-5)

直刃鎌である。欠損部分は少なく、良好に遺存する。全長10.0cm、刃部最大幅2.9cm。基部から刃部先端にかけてわずかに幅が狭くなる。折り返しは刃部に対して垂直にはならず、鈍角となる。

**刀子** (図6-2、写真2-3)

完形の刀子である。全長8.6cm、刃部長6.6cm、刃部最大幅1.3cm、茎部長2.0cm、茎部最大幅0.9cm。関は片関で、直角を呈する。先端はわずかに刃のほうへ傾く。茎は関から茎尻に向かってわずかに細くなる。目釘穴は視認できない。

**有袋鉄斧** (図6-3、写真2-3)

他の鉄斧に比べてやや小ぶりの鉄斧で、錆化が進行しており状態は極めて悪い。全長8.6cm、基部幅3.4cm、復元刃部幅4.0cm。肩を持たず刃部に向かって幅が広がる。袋部の折り返しは互いに近づくが密着しない。袋部の内部に木質等はみられない。

**不明鉄器** (図6-4、写真2-4)

性格の不明な鉄器である。残存長12.3cm、幅0.7cm。断面長方形の棒状を呈する。一端は折れて破

面となっているが、もう一端は元来の端部を残している。片面には木質が付着しており、木柄のようなものが嵌め込まれていたと考えられる。鉈の茎の可能性もある。

#### 参考資料

同志社大学歴史資料館が保管している資料中に、当古墳出土資料としてさらに刀子1本が保管されている。つまり、刀子は計3本存在している。しかし、当古墳からは東槨と西槨から1本ずつ、計2本が出土したとされており、『城陽市史』でもこの3本目の刀子は報告されていない。付属のラベルには、「盗掘孔」の記述があり、もともと東槨から2本の刀子が出土していたか、あるいは保管上何らかの混乱があったかもしれないが、今となっては不明である。ここでは参考資料として報告しておく。

#### 刀子(図6-5、写真2-7)

銹化が進み、刃部と茎部は途中から欠損している。残存長11.5cm、刃部残存長8.8cm、刃部最大幅2.1cm、茎部残存長2.7cm、茎部最大幅1.8cm。切先の破片が残るが接合しない。関はナデ角を呈し、茎部には木質が残る。

### 3. まとめ

以下、特筆すべき遺物と、副葬品の組成を中心に本墳の位置づけを行う。

東槨から出土した銅鏃是有樋型銅鏃と呼称されるもので、既に松木武彦氏や鐘方正樹氏らによって分類され、京都府元稲荷古墳例が祖型とされる(松木1992、鐘方2005)。松木氏は本例を前期後葉に、鐘方氏は前期中葉に位置付けており、当古墳東槨の年代も前期中葉まで遡るか、後葉まで下るかということになるが、いずれにしても祖形を出土した元稲荷古墳は前Ⅱ期(大賀2002、2013)の年代が与えられ、これより東槨の築造時期は下ると考えられる。

東槨からは他に、U字形に折り曲げられた鉄剣が出土している。武器や農耕具を折り曲げて副葬する例は既に知られており、清家章氏はこれらを「折り曲げ鉄器」と呼称し、神仙思想に基づく儀礼行為の痕跡であるとしている(清家2002)。また、鉄剣を折り曲げる例は前期古墳に集中し、かつ小規模な円墳・方墳によくみられること、鏡と共伴しにくいことを挙げている。盗掘を受けているため元来の副葬品組成は不明だが、当古墳が前期に築造された小規模な方墳であることはこの指摘に合致する。しかし、折り曲げ鉄器の出土は瀬戸内沿岸を中心に分布しており、本資料は近畿における珍しい一例である。

当古墳の各埋葬施設からは、年代決定に有効な埴輪や副葬品の組み合わせが見いだせないため、築造時期を細かく推定することは困難である。しかし、中央槨出土の三角縁神獸鏡は古相を示すもので(岸本1989)、大賀克彦氏による編年で前Ⅱ期の要素に含まれ、前期中葉とされる西槨の四獣鏡(下垣2003)や東槨の銅鏃より古い段階の所産である。これは構築された順序と矛盾せず、当古墳の築造時期も東槨・西槨出土の遺物に与えられる年代よりも時期的に確実に遡るとみて大過ない。

当古墳の副葬品組成の特徴としては、中央、東、西の各埋葬施設とも鉄製農具を中心とし、鉄鏃を除き各副葬品ごとに1点ずつ埋納している点が挙げられる。盗掘を受けている東槨の本来の組成は不明だが、残された副葬品からもその傾向は十分みてとれる。ここで当古墳と同様に複数の埋葬施設



を持ち、副葬品も豊富な4号墳と比較してみたい。

4号墳の東槨からは銅30、鉄剣1、土師器壺1が、西槨からは画文帯神獸鏡1、内行花文鏡1、勾玉2、小玉48、管玉66、鉄やり2、鉈片2が出土した。2号墳に比べ4号墳には農工具の副葬が少なく、東槨は武器類、西槨は玉類と銅鏡が主体である。さらに、4号墳では銅鏡や武器を複数埋納している点も2号墳とは異なる。さらに、2号墳の3基の埋葬施設が共通して農工具を主体とするのに対して、4号墳は2基の埋葬施設の副葬品に共通性が見られない。こうした点で、両古墳は同一の古墳群中に含まれながら異なる性格を持つ。このような差異が何を表すかは考察しきれなかったが、前期古墳を考える上でこうした1古墳に複数の埋葬施設をもつ古墳の特質や、古墳群内での副葬品組成の比較についても、今後検討を進めていく必要がある。

## おわりに

西山2号墳は前期でも比較的早い段階に築造された方墳で、銅鏡や多様な武器・農工具を副葬していた。同様な古墳の調査例は多いとはいえない中、今回は武器・農工具の資料報告を行うことで、貴重な例の存在を再度示すことができたように思う。今後、本稿が古墳時代研究に少しでも貢献できれば幸いである。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたっては、以下の方々や機関からご助言・ご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

金宇大 浜中邦弘 吉村和明 若林邦彦 城陽市歴史民俗資料館（敬称略・五十音順）

## 主要参考文献

- 大賀克彦2002「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群（清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ）』清水町教育委員会
- 大賀克彦2013「前期古墳の築造状況とその画期」『前期古墳からみた播磨（第13回播磨考古学研究集会の記録）』播磨考古学研究集会実行委員会
- 鐘方正樹2005「玉手山古墳群の研究結果と諸課題」『玉手山古墳群の研究Ⅴ－総括編－』柏原市教育委員会
- 堅田直・白石太一郎1962「京都府西山第1, 第2, 第5号墳発掘調査概報」『先史学研究』四 同志社大学先史学研究会
- 岸本直文1989「三角縁神獸鏡製作の工人群」『史林』第72巻第5号 史学研究会
- 小泉祐司ほか1999「西山古墳群」『城陽市史』第3巻 城陽市史編さん委員会
- 下垣仁志2003「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』第49集 九州古文化研究会
- 清家章2002「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」『待兼山論叢』第36号史学篇 大阪大学大学院文学研究科
- 千賀久1990「第7節 鏃」『園部垣内古墳（同志社大学文学部考古学調査報告 第6冊）』同志社大学文学部文化学科
- 同志社大学考古学研究会1962「山城久津川古墳群の研究」『同志社考古』第2号
- 日野宏2010「東大寺山古墳副葬品の群構成とその特質について」『東大寺山古墳の研究－初期ヤマト王権の対外交渉と地域間交流の考古学的研究－』平成19～20年度科学研究費補助金（基礎研究（B））研究成果報告書 東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館
- 古瀬清秀1991「4. 農工具」『古墳時代の研究 副葬品』雄山閣出版
- 松木武彦1992「銅鏃の終焉－長法寺南原古墳出土の銅鏃をめぐって－」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2冊 大阪大学南原古墳調査団



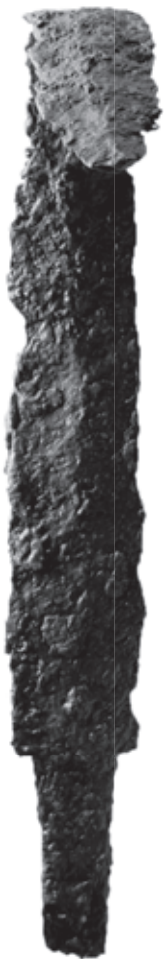
1



2



3



4



5

写真1 鉄斧・鉄剣

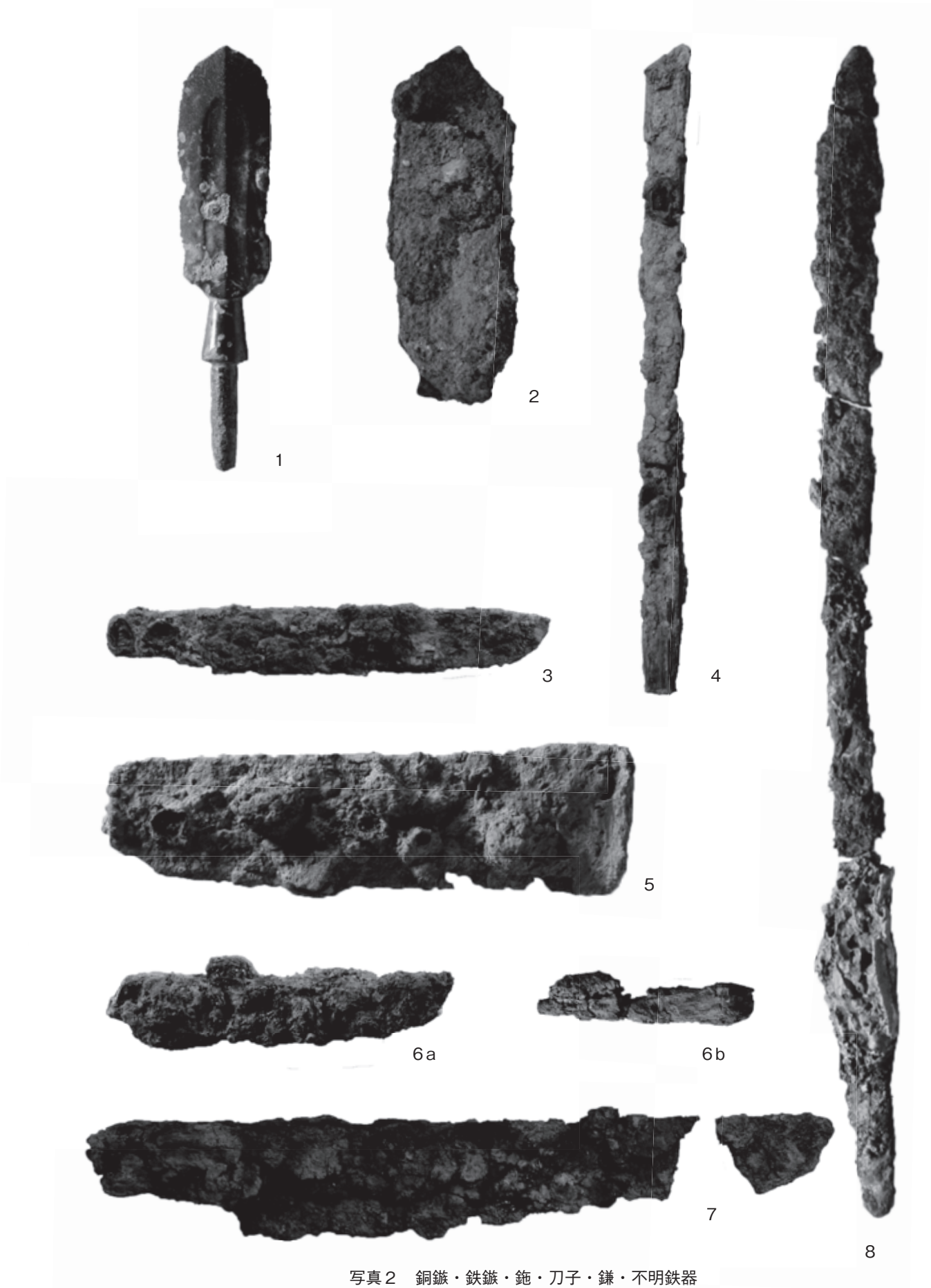


写真2 銅鍬・鉄鍬・鉞・刀子・鎌・不明鉄器